

安全の彼方へ

日本医療安全学会理事長 酒井亮二

病気という言葉には人間の気持ちが入っている。英語の *disease*, *sick*, *ill* にも気持ち・気分が込められている。ラテン語の *morbus* は悪い状態という意味。古代から人は、患者の状態を物質と気持ちの両側面からとらえている。現代にいたるまで、人々は大きな病に対して聖なる力に祈る。

今日の「安全」という言葉には物的環境での安全が中心となっている。その理由は、様々な医療器械と医薬品の開発は永遠と続き、医療機関は多種多様な物的な技術を年々取り込んでいることにある。今日では医療従事者は多数の複雑な物的環境の中で作業を繰り返し続けている。そこには、おびただしい情報エラーが発生し、患者の安全にとって巨大なリスクになっている。

医療現場におけるそれらの物的技術(ハードウェア)リスクを低減する方法として、IT、人工知能、IoT、ロボットなどの情報処理技術がますます開発され、近未来の医療機関では医療技術の物質的安全に対する自動化が進む。全自動洗濯機は人手を削減でき、人間の労苦を低減する。工学は物質の安全な使用を目指し、技術の自動化を進めている。医療資源の安全な使用はこの工学原理によっても促進する。

他方、病人の心の悩みは、安全な物質的環境だけでは解決できない。「人間として真心のこもった医療」を提供することも医療の本質である。

苦痛を取り除き、不安を解消し、人間らしい治療生活を提供する、等々。もともと、医療はこれらを究極の命題としている。安心・信頼・満足・人間の尊厳といった心の深層。マネジメントに関するこれらの諸課題へ挑戦することも医療安全の課題の一つと云い得ます。

不安・苦痛・悲痛・人間性軽視・恐怖を誘発する医療は、「ブラック医療」として万人から遠ざけられる.... その対極に、人間味にあふれる輝かしい医療という巨大な財宝が横たわっている。